

中国系シンガポール人の家庭内多言語使用：言語政策による世代間ギャップ

Cindy Toh S.Y.¹ 木山幸子²¹東北大学文学部、²東北大学大学院文学研究科¹cindy.toh.sing.yee.s7@dc.tohoku.ac.jp, ²skiyama@tohoku.ac.jp

1. はじめに

中国系シンガポール人は、シンガポール国籍を持つ 323 万人の 74.1% を占めているが、さらに方言によって細かく分けられる。彼らは、「中国系シンガポール人」は、「方言話者」、「中国系の人」、または「シンガポール人」のいずれか単一のアイデンティティを持つか、あるいはその複数を混合させたアイデンティティを持っている。しかしそうしたアイデンティティは、実際の言語に対する態度や使用と一致しているわけではない。建国以来の種々の言語政策が、様々な変容や世代間の差異をもたらしてきたのである。

中国系シンガポール人にとっての方言は、福建語や関東語などがあり、元来様々な領域で一定の役割を果たしてきてきた。しかしそうした役割は、1965 年から始まった言語政策や言語運動によって変容した。とりわけ、1979 年に実施されたスピーク・マンダリン運動 (Speak Mandarin Campaign: SMC) は、中国語 (普通話) に親しむよう家庭内での普通話使用を促進するとともに (Li, 2001; Tan, 2007; Xu et al., 1998)、方言使用を排除しようとする目的で施行された (Gupta & Siew, 1995; Tan & Ng, 2010)。その運動はいったん功を奏したものの、80 年代後期になると、英語が主要な家庭内言語となってきた。そのため、SMC に修正が施され、中国語に経済的な価値が付与された。それにも関わらず、家庭内の英語使用は増える一方である (Department of Statistics Singapore, 2016; Curdt-Christiansen, 2015)。この状況からすれば、中国系シンガポール人が SMC の意図に対して疑いを持っていることが明らかである (Ng, 2014; Xie & Cavallaro, 2016)。

他方で、政府は英語の重要性も繰り返し強調してきた。それによって「シングリッシュ (Singlish)」と呼ばれる口語がシンガポール社会で生じたが、シングリッシュはシンガポールで使われる英語に悪影響を与え (Tan, 2007)、シンガポール人の使う英語が外国人には理解できないものとなってしまうのではないかと危惧された (Bolton & Ng, 2014; Ng, 2008)。そこで政府は、シンガポール人にシングリッシュの代わりにより標準的な英語使用を促すために、スピーク・グッド・イングリッシュ運動 (Speak Good English Movement: SGEM) を施行した (Bokhorst-Heng, 2005; Rubdy, 2001)。

シンガポールの言語使用や言語態度に関しては、すでに多くの先行研究が蓄積されており、人口調査のデータは一般的な言語使用のパターンを示している。しかし、そうした包括的な資料には、なぜそのようなパターンが生じるのか使用者の動機についての説明がない (Cavallaro & Serwe, 2010; Siemund et al., 2014)。とりわけ、(1) 世代を超える中国系シンガポールのコミュニティーにおける全体的な変化過程、(2) 自分とより若い世代との間に存在する「言語ギャップ」の解決策、(3) 現在の SMC の実行可能性、そして (4) SGEM がどのように現今の中国系シンガポール人の言語使用と態度に影響しているのか、といった問題点についての考察は、これまでにはないようである。本研究の目的は、中国系シンガポール人コミュニティーの言語状況に対し、より新しく世代横断的な観点を挙げることで、SMC と SGEM がもたらした言語状況への影響を調査することである。言語使用や意識の変化の動機を探り、より身近な状況での言語使用のパターンを解明するために、家庭内の言語使用に焦点を当て、10 代から 60 代まで (表 1) の中国系シンガポール人を対象とした調査を実施した。

表 1. 年齢層のカテゴリー

	年齢層	定義
SMC1	45 歳以上	SMC の第一段階 (1990) の終わりに中学校を卒業し、学校教育で SGEM の影響を受けていない
SMC2	31 ~ 44 歳	このグループで最も最年少の人たちは SMC の第二段階と SGEM の終わり (2004) に中学校を卒業した
SMC3	22 ~ 30 歳	SMC の第三段階と SGEM の第二段階 (2005~) が始まったころに学校教育を受けた
SMC4	21 歳以下	若い世代に向けられた SMC とシングリッシュに対してより寛容になった SGEM が実施された頃に学校教育を受けた

2. 方法

[参加者及び材料]

中国系シンガポール人 149 名がアンケート調査に回答した。回答者は雪達磨式標本抽出法 (Milroy & Gordon, 2003) を利用して集められた。この方法は、初期の参加者のソーシャルネットワークを利用して、参加者により多くの参加者を呼ばせる標本抽出法を指す。データ収集を促進するため、本研究で使われた調査票は Google Forms で配布した。

本研究は、家庭内における世代間の差があるかどうかを調べることを目的としたため、祖父母のうち少なくとも 1 人、両親のうち少なくとも 1 人、また兄弟のうち少なくとも 1 人と話す場合に使用する言語を選んだ回答者を抽出した。結果として、参加者 112 名 (女性 68 名、男性 44 名、 31.5 ± 13.6 歳) の回答を分析対象とした。調査票は、人口統計の情報に関する質問からなる Section 1、回答者の言語背景について聞く Section 2、異なる対話者と異なる話題に対する言語使用のパターンを引き出す Section 3、そして言語に対する態度を問う Section 4 の 4 つの部分から成った。

[分析]

中国系シンガポール人の使用言語がどのような要因によって決まるのかを調べるために、カイ二乗自動相互作用検出 (CHi-squared Automatic Interaction Detection: CHAID) 法を用いた決定木

を形成した。このアルゴリズムは、異なる要因間でどのように互いに影響するのかを測定するのに相応しく (Murphy & Comiskey, 2013)、連続変数とカテゴリー変数を同時に分析することができる。本研究では、言語使用を決める要因として、「対話者」「話題」「年齢層」「先祖の方言」「学歴」「ジェンダー」「英語口頭能力 (LPSE)・理解力 (LPUE) の自己評価」と「中国語普通話口頭能力 (LPSM)・理解力 (LPUM) の自己評価」を含めた。この決定木を構築する際には、CP (複雑さパラメータ) = 0.016 で剪定し、最終的に 5 段階の決定木をもたらした。

3. 結果

図 1 の決定木に示されたように、中国系シンガポール人がどのような言語を使うのかは、主に年齢層・対話者・LPUE・LPSM に影響されていた。SMC1 グループ (45 歳以上) の参加者の使用する主要言語は方言であり、それは対話者や言語能力等他の要因に依らなかった (ノード 2)。しかし他の年代層では、対話者の身分に応じて使用する言語を変えていることが分かる。特に、SMC2 グループ (31~44 歳) は、祖父母と話すときには方言で話す傾向を示す (45%、ノード 12) のに対し、SMC3 及び SMC4 に属する参加者 (30 歳以下) は中国語普通話のみを使う傾向が観察された (ノード 13)。

また、SMC3 と SMC4 の参加者は、SMC1 と

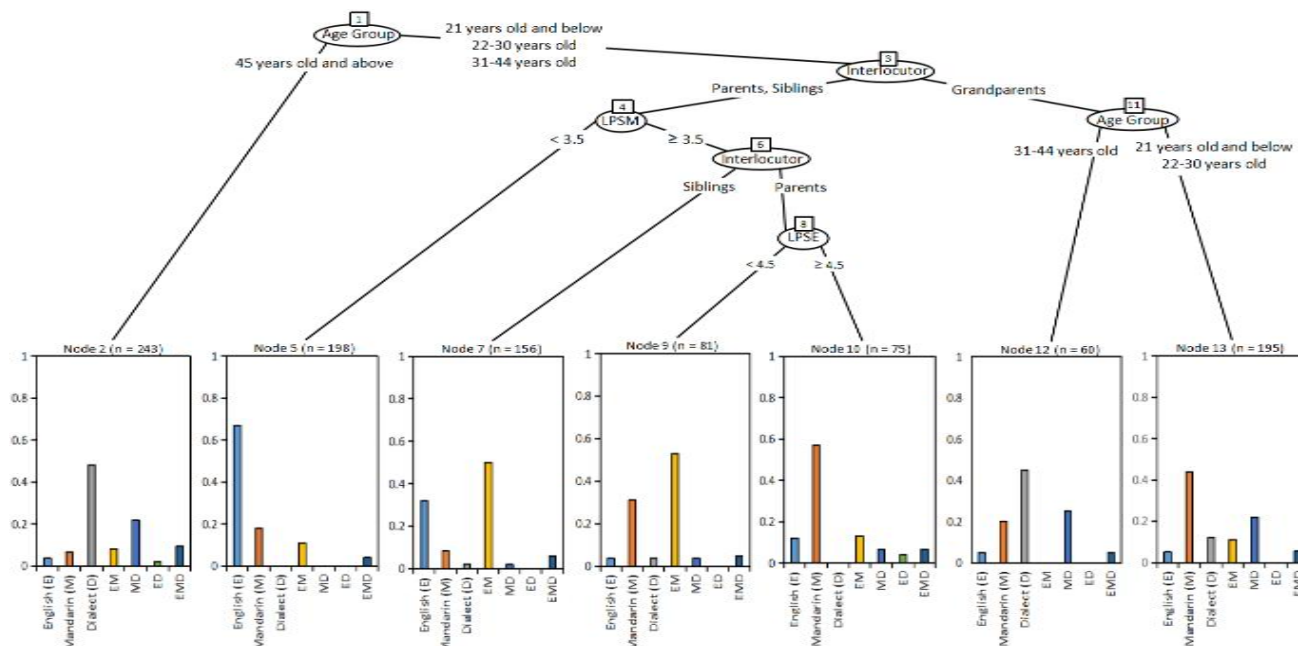


図 1. 使用言語選択についての、「対話者」「話題」「年齢層」「先祖の方言」「学歴」「ジェンダー」「LPSE (英語口頭能力)」「LPUE (英語理解能力)」「LPSM (中国語普通話口頭能力)」「LPUM (中国語普通話理解能力)」の影響の様相を描いた決定木

SMC2 の参加者と異なり、祖父母と話すときも英語を使う傾向が示されている。SMC1 の参加者の言語選択は、対話者や言語能力に左右されないが、他の年齢層に属する参加者は他の要因にも影響を受けている。対話者が両親か兄弟か、また自分の中国語口頭能力を fair かそれ以下 (poor, very poor) と評価した参加者は、英語使用を選択する傾向があった (67%、ノード 5)。これに対して、自分の中国語口頭能力を good か very good と評価した参加者は、兄弟と話すときは英語と中国語の両方を使う傾向が見られた (50%、ノード 7)。

さらに、SMC2 以降の世代 (44 歳以下) において、対話者が両親であるときは、中国語や英語の能力の自己評価によって言語選択が分かれた。英語口頭能力を very good と評価した参加者は中国語のみを使用する傾向にあるのに対して (57%、ノード 10)、英語口頭能力を good と評価する参加者は英語と中国語を併用する傾向があるようだった (ノード 9)。

以上のように、概ね方言から中国語普通話、また中国語普通話から英語にかけて、3 世代にわたってのシフトを観察することができた。

4. 考察

全体として、自分と同世代の兄弟と話すときの言語使用において、方言から英語にシフトする動きが観察された。この結果は、先行研究 (例えば、Curdt-Christiansen, 2015) の生じた結果と 2015 に行われた一般世帯調査 (Department of Statistics Singapore, 2016) のデータと一致している。また、SMC によって生じた方言 (SMC1 & SMC2) から中国語普通話 (SMC3 & SMC4) へのシフトが、本研究ではとりわけ祖父母に接するときに顕著に観察された。本研究でいう「祖父母」世代は、シンガポールの中国系方言を維持するために最も欠かせない存在だと考えられるが、現今のシンガポールではそのようにならない可能性が示唆されている。

こうした方言から中国へのシフトは、次の 2 つの原因で起こったと考えられる。第一に、特に 21 歳以下 (SMC4) の参加者の祖父母世代は、他の世代の祖父母よりも比較的若いいため、方言の他にも中国・英語あるいは両方とも話せるマルチリンガルになっている可能性がある。第二に、祖父母の世代も、より若い世代に対して中国語普通話を使うことが求められるようになってきている可能性が挙げられる。祖父母世代が方言の代わりに中国語を使うようになることは、家庭内での方言を自発

的に排除し、方言がシンガポールから消えていくことを意味するだろう。

マレー人の場合、いかなる社会的な要因にもかかわらず、祖父母と話すときは英語のような H 変種 (high variety: 公的な意思疎通に使われる言語変種) よりもマレー語のような L 変種 (low variety: 私的なやり取りで使われる言語変種) を使う傾向があるという (Cavallaro and Serwe, 2010)。もし中国系シンガポール人による中国語方言が 31 歳以上の中国系シンガポール人にとっての L 変種であるならば、今の 30 歳以下の若い中国系シンガポール人においては、もはや中国語普通話が L 変種に取って代わられているのではないか。さらに、もし L 変種とみなされる方言が「年寄」、「不器用な人」、「低学歴の人」など (Tan & Ng, 2010) と関係づけられるなら、中国語普通話も、だんだんとそうした性質を帯びていくのかもしれない。これからの祖父母が中国語普通話の維持に関してどのように貢献するのか、まだ見当がつかない。

また、両親に接するときに英語使用選択が増えるのは、予想されたことであったが、44 歳以下の世代 (SMC2-4) の参加者の言語選択が英語と中国語の口頭能力に依存するのは予想外であった。特に、比較的中国語口頭能力が高い参加者の間で、英語口頭能力が非常に良い参加者より低めに評価した参加者のほうが英語選択率が高いことは、意外な結果であった。Pakir (1991) はシンガポール人学生の英語能力を検討したが、彼らは、シンガポール英語を熟知して自らの英語能力に自信を持つことによって、シンガポール英語の標準変種と口語変種を楽に切り替えられるようになると論じている。自分の英語能力により強い自信を持つ話者は、他にも話せる言語や変種が多いことを反映し、そのために中国語選択率が上がる結果になったのかもしれない。

そうであるなら、自分の言語能力を磨き自信を持つことは、SGEM の意図からすれば不本意な効果をもたらすことになるかもしれない。Lu (2011) は、シンガポール人が一般に SGEM の意図ないしその存在にすら気づいていない様相を示唆しているが、実際には、その認知の度合いに格差が生じているのかもしれない。つまり、なかには SGEM をよく認知しているシンガポール人もいて、自分の使用する英語の変種が標準的なのかシングリシュなのかといったことをよく考え、その結果として自分の英語力を厳しく評価しているかもしれない。しかし、SGEM の実施が、これからの中国系シンガポール人の中国語普通話の使用にど

のような影響を及ぼすかについては、さらなる研究が必要と考えられる。

引用文献

- Bokhorst-Heng, W. D. (2005). Debating Singlish. *Multilingua*, 24, 185-209. <https://doi.org/10.1515/mult.2005.24.3.185>
- Bolton, K. & Ng, B. C. (2014). The dynamics of multilingualism in contemporary Singapore. *World Englishes*, 33(3), 307-318. <https://doi.org/10.1111/weng.12092>
- Cavallaro, F. & Serwe, S. (2010). Language use and language shift among the Malays in Singapore. In Li, W. (Ed.), *Applied Linguistics Review*, Volume 1; Volume 2010 (pp. 129-169). De Gruyter Mouton.
- Curdt-Christiansen, X. L. (2015). Family Language Policy in the Chinese community in Singapore: A Question of Balance?. In Li, W. (Ed.), *Multilingualism in the Chinese diaspora worldwide* (pp. 255-275). Routledge.
- Department of Statistics Singapore. (2016). *Statistics Singapore - General Household Survey 2015* [PDF file]. Retrieved from <https://www.singstat.gov.sg/-/media/files/publications/ghs/ghs2015/ghs2015.pdf>
- Gupta, A. F. & Siew, P. Y. (1995). Language shift in a Singapore family. *Journal of Multilingual & Multicultural Development*, 16(4), 301-314. <https://doi.org/10.1080/01434632.1995.9994609>
- Li, W. (2001). Competing forces in language maintenance and language shift: Markets, hierarchies and networks in Singapore. *Estudios de Lingüística Aplicada*, 34, 13-28. <https://doi.org/10.22201/enallt.01852647p.2001.34.770>
- Lu, S. Q. (2011, December 6). A decade later: Singapore's Speak Good English Movement. https://s.qiyouyi.lu/wp-content/uploads/2019/05/SQL_ADecadeLater.pdf
- Milroy, L. & Gordon, M. (2003). *Sociolinguistics: Method and interpretation*. Blackwell Publishing.
- Murphy, E. L. & Comiskey, C. M. (2013). Using chi-Squared Automatic Interaction Detection (CHAID) modelling to identify groups of methadone treatment clients experiencing significantly poorer treatment outcomes. *Journal of Substance Abuse Treatment*, 45(4), 343-349. <https://doi.org/10.1016/j.jsat.2013.05.003>
- Ng, B. C. (2008). Linguistics pragmatism and globalization and the impact on the patterns of input in Singaporean Chinese homes. In R. Rubdy, & P. K. W. Tan (Eds.), *Language as commodity: Global structures, local marketplaces* (pp. 70-88). Continuum.
- Ng, C. L. (2014). A study of attitudes towards the Speak Mandarin Campaign in Singapore. *Intercultural Communication Studies*, 23(3), 53-65. <https://web.uri.edu/iaics/files/NG-Chin-Leong.pdf>
- Pakir, A. (1991). The range and depth of English-knowing bilinguals in Singapore. *World Englishes*, 10(2), 167-179. <https://doi.org/10.1111/j.1467-971X.1991.tb00149.x>
- Rubdy, R. (2001). Creative destruction: Singapore's Speak Good English movement. *World Englishes*, 20(3), 341-355. <https://doi.org/10.1111/1467-971X.00219>
- Siemund, P., Schulz, M. E. and Schweinberger, M. (2014). Studying the linguistic ecology of Singapore: A comparison of college and university students. *World Englishes*, 33(3), 340-362. <https://doi.org/10.1111/weng.12094>
- Tan, E. K. B. (2007). The multilingual state in search of the nation: The language discourse in Singapore's nation-building. In Lee, H. G. & Suryadinata, L. (Eds.), *Language, Nation and Development in Southeast Asia* (pp. 74-117). Research Collection School Of Law.
- Tan, S. J. H. & Ng, B. C. (2010). Three generations under one roof: a study of the influence of the presence of grandparents on language shift, identity and attitudes. *TRANEL (TRavaux NEuchâtois de Linguistique)* 52, 69-92. https://doc.rero.ch/record/29280/files/Tan_Jun_Hao_Sherman_-_Three_generation_under_one_roof_a_study_of_the_influence_of_the_presence_of_20120523.pdf
- Xie, W. & Cavallaro, F. (2016). Attitudes towards Mandarin-English bilingualism: A study of Chinese youths in Singapore. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 37(6), 628-641. <https://doi.org/10.1080/01434632.2015.1122603>
- Xu, D., Chew, C. H. & Chen, S. (1998). Language use and language attitudes in the Singapore Chinese community. In Gopinathan, S., Pakir, A., Ho, W. K. & Saravanan, V. (Eds.), *Language, society and education in Singapore: Issues and trends* (pp. 133-154). Times Academic Press.